

# 皮膚と心

太宰治

青空文庫



ぷつツと、ひとつ小豆粒に似た吹出物が、左の乳房の下に見つかり、よく見ると、その吹出物のまわりにも、ぱらぱら小さい赤い吹出物が霧を噴きかけられたように一面に散点していて、けれども、そのときは、痒かゆくもなんともありませんでした。憎い気がして、お風呂で、お乳の下をタオルできゅつきゅつと皮のすりむけるほど、こすりました。それが、いけなかつたようでした。家へ帰って鏡台のまえに坐り、胸をひろげて、鏡に写してみると、気味わるうございました。銭湯から私の家まで、歩いて五分もかかりませぬし、ちよつとその間に、お乳の下から腹にかけて手のひら二つぶんのひろさでもって、真赤に熟れて苳いちぢいみたいになって

いるので、私は地獄絵を見たような気がして、ずっとあたりが暗くなりました。そのときから、私は、いままでの私でなくなりました。自分を、人のような気がしなくなりました。気が遠くなる、というのは、こんな状態を言うのでしょうか。私は永いこと、ぼんやり坐って居りました。暗灰色の入道雲が、もくもく私のぐるりを取り囲んでいて、私は、いままでの世間から遠く離れて、物の音さえ私には幽かすかにしか聞えない、うつつとうしい、地の底の時々刻々が、そのときから、はじまったのでした。しばらく、鏡の中の裸身を見つめているうちに、ぽつり、ぽつり、雨の降りはじめのように、あちら、こちらに、赤い小粒があらわれて、頸くびのまわり、胸から、腹から、背中のようにまで、まわっている様子な

ので、合せ鏡して背中を写してみると、白い背中のスロオプに赤い霰あられをちらしたように一ぱい吹き出ていましたので、私は、顔を覆つてしまいました。

「こんなものが、できて。」私は、あの人に見せました。六月のはじめのことで、ございます。あの方は、半袖のワイシャツに、短いパンツはいて、もう今日の仕事も、一とおりすんだ様子で、仕事机のまえにぼんやり坐つて煙草を吸っていました。立つて来て、私にあちこち向かせて、眉をひそめ、つくづく見て、ところどころ指で押してみても、

「痒くないか。」と聞きました。私は、痒くない、と答えました。ちつとも、なんとも無いのです。あの方は、首をかしげて、それ

から私を縁側の、かつと西日の当る箇所立たせ、裸身の私をくるくる廻して、なおも念入りに調べていました。あの人は、私からだのことに就いては、いつでも、細かすぎるほど気をつけてくれます。ずいぶん無口で、けれども、しんは、いつでも私を大事にします。私は、ちゃんと、それを知っていますから、こうして縁側の明るみに出されて、恥ずかしいはだかの姿を、西に向け東に向け、さんざ、いじくり廻されても、かえって神様に祈るような静かな落ちついた気持になり、どんなに安心のことか。私は、立ったまま軽く眼をつぶっていて、こうして死ぬまで、眼を開きたくない気持でございました。

「わからねえなあ。ジンマシンなら、痒い筈だが。まさか、ハシ

カじやなかう。」

私は、あわれに笑いました。着物を着直しながら、

「糠ぬかに、かぶれたのじやないかしら。私、銭湯へ行くたんびに、胸や頸を、とてもきつく、きゅつきゅつこすったから。」

それかも知れない。それだろう、ということになり、あの人は薬屋に行き、チュウブにはいった白いべとべとした薬を買って来て、それを、だまって私のからだに、指で、すり込むようにして塗ってくれました。すつと、からだが涼しく、少し気持も軽くなり、

「うつらないものかしら。」

「気にしちやいけねえ。」

そうは、おっしゃるけれども、あの人の悲しい気持が、それは、私を悲しがつてくれる気持にちがいないのだけれど、その気持が、あの人の指先から、私の腐った胸に、つらく響いて、ああ早くなおりたいと、しんから思いました。

あの人は、かねがね私の醜い容貌を、とても細心にかばつてくれて、私の顔の数々の可笑<sup>おか</sup>しい欠点、——冗談にも、おっしゃるようなことは無く、ほんとうに露ほども、私の顔を笑わず、それこそ日本晴れのように澄んで、余念ない様子をなさつて、

「いい顔だと思うよ。おれは、好きだ。」

そんなことさえ、ぷつんとおっしゃることがあつて、私は、どぎまぎして困つてしまうこともあるのです。私どもの結婚いたし



ましたのは、ついことしの三月でございます。結婚、という言葉さえ、私には、ずいぶんキザで、浮わついで、とても平気で口に言い出し兼ねるほど、私どもの場合は、弱く貧しく、てれくさいものでございました。だいいち、私は、もう二十八でございますもの。こんな、おたふくゆえ、縁遠くて、それに二十四、五までには、私にだつて、二つ、三つ、そんな話もあつたのですが、まとまりかけては、こわれ、まとまりかけては、こわれて、それは私の家だつて、何もお金持というわけでは無し、母ひとり、それに私と妹と、三人ぐらしの、女ばかりの弱い家庭でございますし、とても、いい縁談なぞは、望まれませぬ。それは慾の深い夢でございましょう。二十五になつて、私は覚悟をいたしました。一生、

結婚できなくとも、母を助け、妹を育て、それだけを生き甲斐がいとして、妹は、私と七つちがいの、ことし二十一になりますけれど、きりようも良し、だんだんわがままも無くなり、いい子になりかけて来ましたから、この妹に立派な養子を迎えて、そうして私は、私としての自活の道をたてよう。それまでは、家に在つて、家計、交際、すべて私が引き受けて、この家を守ろう。そう覚悟をきめますと、それまで内心、うじやうじや悩んでいたもの、すべてが消散して、苦しさも、わびしさも、遠くへ去つて、私は、家の仕事のかたわら、洋裁の稽古にはげみ、少しずつご近所の子供さんの洋服の注文なども引き受けてみるようになって、将来の自活のあてもつきかけて来たころ、いまの、あの人の話があつたのでご

ございます。お話を持つて来て下さったお方が、謂わば亡父の恩人  
とでもいうような義理あるお方でございましたから、むげに断る  
こともできず、また、お話を承ってみると、先方は、小学校を出  
たきりで、親も兄弟もなく、その私の亡父の恩人が、拾い上げて  
小さい時からめんどう見てやっていたのだそうで、もちろん先方  
には財産などある筈はなく、三十五歳、少し腕のよい図案工であ  
つて、月収は二百円もそれ以上もはいる月があるそうですが、ま  
た、なんにもはいらぬ月もあつて、平均して、七、八十円。それ  
に向うは、初婚ではなく、好きな女のひとと、六年も一緒に暮し  
て、おとし何かわけがあつて別れてしまい、そののちは、自分  
は小学校を出たきりで学歴も無し、財産もなし、としもとつてい

ることだし、ちゃんとした結婚なぞとても望めないから、いつそ一生めとらず、のんきに暮そうと、やもめぐらしをして居る由にて、それを、亡父の恩人が、なだめ、それでは世間から変人あつかいされて、よくないから、早くお嫁を貰いなさい、少し心あたりもあるから、と言つて、私どものほうに、内々お話の様子なされて、そのときは私も母と顔を見合せ、困つてしまいました。一つとして、よいところのない縁談でございますもの。いくら私が、売れのこりの、おたふくだつて、あやまち一つ犯したことはなし、もう、そんな人でも無ければ、結婚できなくなっているのかしらと、さいしよは腹立しく、それから無性に侘<sup>わ</sup>びしくなりました。お断りするより他、ないのでございますが、何せお話を持つて来

られた方が、亡父の恩人で義理あるお人ですし、母も私も、ことを荒立てないようにお断りしなければ、と弱気に愚図愚図いたして居りますうちに、ふと私は、あの人が可哀想になつてしまいました。きつと、やさしい人にちがいない。私だつて、女学校を出たきりで、特別になんの学問もありやしない。たいへんな持参金があるわけでもない。父が死んだし、弱い家庭だ。それに、ごらんのとおりの、おたふくで、いい加減おばあさんですし、こちらこそ、なんのいいところも無い。似合いの夫婦かも知れない。どうせ、私は不仕合せなのだ。断つて、亡父の恩人と気まづくくなるよりはと、だんだん気持が傾いて、それにお恥ずかしいことには、少しは頼のほてる浮いた気持もございました。おまえ、ほんとに

いいのかねえ、とやはり心配顔の母には、それ以上、話もせず、私から直接、その亡父の恩人に、はつきりした返事をしてしまいました。

結婚して、私は幸福でございました。いいえ。いや、やつぱり、幸福、と言わなければなりません。罰があたります。私は、大切にいたわられました。あの人は、何かと気が弱く、それに、せんの女に捨てられたような工合らしく、そのゆえに、一層おどおどしている様子で、ずいぶん歯がゆいほど、すべてに自信がなく、<sup>や</sup>痩せて小さく、お顔も貧相でございます。お仕事は、熱心にいたします。私が、はっと思つたことは、あの人の凶案を、ちらと見て、それが見覚えのある凶案だつたことでございます。なんとい

う奇縁でしょう。あの人に伺ってみて、そのことをたしかめ、私は、そのときはじめて、あの人に恋をしたみたいに、胸がときめきいたしました。あの銀座の有名な化粧品店の、蔓バラ模様の商標は、あの人が考案したもので、それだけでは無く、あの化粧品店から売り出されている香水、石<sup>せつけん</sup>鹼、おしろいなどのレッテル意匠、それから新聞の広告も、ほとんど、あの人の図案だったのでございます。十年もまえから、あの店の専属のようになって、異色ある蔓バラ模様のレッテル、ポスター、新聞広告など、ほとんどおひとりで、お画きになつていたのでさうで、いまでは、あの蔓バラ模様は、外国の人さえ覚えていて、あの店の名前を知らなくても、蔓バラを典雅に絡<sup>から</sup>み合せた特徴ある図案は、どなただ

って一度は見て、そうして、記憶しているほどでございませぬものね。私なども、女学校のころから、もう、あの蔓バラ模様を知っていたような気がいたします。私は、奇妙に、あの図案にひかれて、女学校を出てからも、お化粧品は、全部あの化粧品店のものを使って、謂わば、まあ、ファンでございました。けれども私は、いちどだって、あの蔓バラ模様の考案者については、思ってみたことなかった。ずいぶん、うっかり者のようでございますが、けれども、それは私だけでなく、世間のひと皆、新聞の美しい広告を見ても、その図案工を思い尋ねることなど無いでしょう。図案工なんて、ほんとうに縁の下の力持ちみたいなものですね。私だって、あの人のお嫁さんになって、しばらく経って、それから



はじめて気がついたほどでございますもの。それを知ったときには、私は、うれしく、

「あたし、女学校のころからこの模様だいすきだったわ。あなたがお画きになっていたのねえ。うれしいわ。あたし、幸福ね。十年もまえから、あなたと遠くむすばれていたのよ。こちらへ来ることに、きまっていたのね。」と少しはしゃいで見せましたら、あの人は顔を赤くして、

「ふぎけちやいけねえ。職人仕事じゃねえか、よ。」と、しんから恥ずかしそうに、眼をパチパチさせて、それから、フンと力なく笑って、悲しそうな顔をなさいました。

いつもあの人は、自分を卑下して、私になんとも思っていない

のに、学歴のことや、それから二度目だつてことや、貧相のことなど、とても気にして、こだわつていらつしやる様子で、それならば、私みたいなおたふくは、一体どうしたらいいのでしょうか。

夫婦そろつて自信がなく、はらはらして、お互いの顔が、謂わば羞<sup>はじしわ</sup>皺<sup>はじしわ</sup>で一ぱいで、あの人は、たまには、私にうんと甘えてもら

いたい様子なのですが、私だつて、二十八のおばあちゃんですし、それに、こんなおたふくなので、その上、あの人の自信のない卑下していらつしやる様子を見ては、こちらにも、それが伝染しちやつて、よけいにぎくしゃくして来て、どうしても無邪気に可愛く甘えることができず、心は慕っているのに、逆にかえつて私は、まじめに、冷い返事などしてしまつて、すると、あの人は、氣む

ずかしく、私には、そのお気持ちがわかっていただけに、尚なおのこと、  
どきまぎして、すっかり他人行儀になってしまいます。あの人に  
も、また、私の自信のなさが、よくおわかりの様で、ときどき、  
やぶから棒に、私の顔、また、着物の柄など、とても不器用にほ  
めることがあって、私には、あの人のいたわりがわかっているの  
で、ちつとも嬉しいことはなく、胸が、一ぱいになって、せつな  
く、泣きたくなります。あの人は、いい人です。せんの女のひと  
のことなど、ほんとうに、これぼつちも匂わしたことがございま  
せん。おかげさまで、私は、いつも、そのことは忘れています。  
この家だって、私たち結婚してから新しく借りたのですし、あの  
人は、そのまえは、赤坂のアパートにひとりぐらししていたので

ございませうが、きつと、わるい記憶を残したくないというお心も  
あり、また、私への優しい気兼ねもあつたのでございませう、  
以前の世帯道具一切合切、売り払い、お仕事の道具だけ持つて、  
この築地つぎじの家へ引越して、それから、私にも僅かばかり母からも  
らつたお金がございませうし、二人で少しづつ世帯の道具を買い  
集めたようなわけで、ふとんも箆たんすも、私が本郷の実家から持つ  
て来たのでございませうし、せんの女のひとの影は、ちらとも映ら  
ず、あの人、私以外の女のひとと六年も一緒にいらつしやつた  
など、とても今では、信じられなくなりました。ほんとうに、あ  
の人の不要の卑下さえなかつたら、そうして私を、もつと乱暴に、  
怒鳴つたり、もみくちやにして下さつたなら、私も、無邪気に歌

をうたつて、どんなにでもあの人に甘えることができるように思われるのですが、きつと明るい家になれるのでございますが、二人そろつて、醜いという自覚で、ぎくしゃくして、——私はともかく、あの人、なんで卑下することがございましょう。小学校を出たきりと言つても、教養の点では大学出の学士と、ちつとも変るところございませぬ。レコオドだつて、ずいぶん趣味のいいのを集めていらつしやるし、私がいちども名前を聞いたことさえない外国の新しい小説家の作品を、仕事のあいまあいまに、熱心に読んでいらつしやるし、それに、あの、世界的な蔓バラの凶案。また、ご自身の貧乏を、ときどき自嘲じちようなさいますけれど、このごろは仕事も多く、百円、二百円と、まとまった大金がはいつて

来て、せんだつても、伊豆の温泉につれていつていただいたほどなのに、それでもあの人は、ふとんや箆笥や、その他の家財道具を、私の母に買ってもらつたことを、いまでも気にして、そんなに気にされると、私は、かえつて恥ずかしく、なんだか悪いことをしたように思われて、みんな安物ばかりなのに、と泣きたいほど侘びしく、同情や憐憫れんびんで結婚するのは、間違いで、私は、やっぱりひとりでいたほうがよかつたのじゃないかしら、と恐ろしいことを考えた夜もございました。もつと強いものを求めるいまわしい不貞が頭をもたげることさえあつて、私は悪者でございませぬ。結婚して、はじめて青春の美しさを、それを灰色に過してしまつたくやしさが、舌を噛かみたいほど、痛烈に感じられ、いま

のうち何かでもって埋め合せしたく、あの人とふたりで、ひっそり夕食をいただきながら、侘びしさ堪えがたくなつて、お箸と茶碗持ったまま、泣きべそかいてしまったこともございます。何もかも私の慾でございましょう。こんなおたふくの癖に青春なんて、とんでもない。いい笑いものになるだけのことです。私は、いまのままで、これだけでもう、身にあまる仕合せなのです。そう思わなければいけません。つつい、わがままも出て、それだから、こんどのように、こんな気味わるい吹出物に見舞われるのです。薬を塗ってもらったせいとか、吹出物も、それ以上はひろがらず、明日は、なおるかも知れぬと、神様にこつそり祈つて、その夜は、早めに休ませていただきました。

寝ながら、しみじみ考えて、なんだか不思議になりました。私は、どんな病気でも、おそれませぬが、皮膚病だけは、とても、とても、いけないのです。どのような苦勞をしても、どのような貧乏をしても、皮膚病にだけは、なりたくないと思っていたものでございます。脚が片方なくつても、腕が片方なくつても、皮膚病なんかになるよりは、どれくらいましかわからない。女学校で、生理の時間にいろいろの皮膚病の病原菌を教わり、私は全身むず痒く、その虫やバクテリアの写真の載っている教科書のペエジを、矢庭に引き破ってしまいました。そうして先生の無神経が、のろわしく、いいえ先生だって、平気で教えているのでは無い。職務ゆえ、懸命にこらえて、当りまえの風を装って教えてい



るのだ、それにちがいないと思えば、なおのこと、先生のその厚顔無恥が、あさましく、私は身悶みもだえいたしました。その生理の時間がすんでから、私はお友達と議論をしてしまいました。痛さと、くすぐったさと、痒さと、三つのうちで、どれが一ばん苦しいか。そんな論題が出て、私は断然、痒さが最もおそろしいと主張いたしました。だって、そうでしょう？ 痛さも、くすぐったさも、おのずから知覚の限度があると思います。ぶたれて、切られて、または、くすぐられても、その苦しさが極限に達したとき、人は、きつと気を失うにちがいない。気を失ったら夢幻境です。昇天でございます。苦しきから、きれいにのがれる事ができるのです。死んだって、かまわないじゃないですか。けれども痒さは、

波のうねりのようで、もりあがっては崩れ、もりあがっては崩れ、果しなく鈍く蛇動し、だどう 蠢動するばかりで、しゅんどう 苦しさが、ぎりぎり結着の頂点まで突き上げてしまう様なことは決してないので、気を失うこともできず、もちろん痒さで死ぬなんてことも無いでしょうし、永久になまぬるく、悶えていなければならぬのです。これは、なんといつても、痒さにまさる苦しみはごぎいますまい。私<sup>しらす</sup>がもし昔のお白州で拷問かけられても、切られたり、ぶたれたり、また、くすぐられたり、そんなことでは白状しない。そのうち、きつと気を失って、二、三度つづけられたら、私は死んでしまふだろう。白状なんて、するものか、私は志士のいどころを一命かけて、守って見せる。けれども、蚤<sup>のみ</sup>か、しらみ、或いは疥<sup>かいせ</sup>

癪んの虫など、竹筒に一ぱい持って来て、さあこれを、お前の背中にぶち撒まけてやるぞ、と言われたら、私は身の毛もよだつ思いで、わなわなふるえ、申し上げます、お助け下さい、と烈女も台無し、両手合せて哀願するつもりでございます。考えるさえ、飛び上るほど、いやなことです。私が、その休憩時間、お友達にそう言つてやりましたら、お友達も、みんな素直に共鳴して下さいました。いちど先生に連れられて、クラス全部で、上野の科学博物館へ行つたことがございますけれど、たしか三階の標本室で、私は、きやつと悲鳴を挙げ、くやしう、わんわん泣いてしまいました。皮膚に寄生する虫の標本が、蟹かにくらいの大さに模型されて、ずらりと棚に並んで、飾られてあつて、ばか！ と大声で叫

んで棍棒こんぼうもつて滅茶苦茶に粉碎したい気持でございました。それから三日も、私は寝ぐるしく、なんだか痒く、ごはんもおいしくございませんでした。私は、菊の花さえきらいなのです。小さい花卉がうじやうじやして、まるで何かみたい。樹木の幹の、でこぼこしているのを見ても、ぞつとして全身むず痒くなります。筋子なぞを、平気でたべる人の気が知れない。牡蠣かきの貝殻。かぼちやの皮。砂利道。虫食った葉。とさか。胡麻ごま。絞り染。蝟たこの脚。茶殻。蝦えび。蜂はちの巣。苺いちご。蟻あり。蓮の実。蠅はえ。うろこ。みんな、きらい。ふり仮名も、きらい。小さい仮名は、虱しらみみたい。グミの実、桑の実、どっちもきらい。お月さまの拡大写真を見て、吐きそうになったことがあります。刺繡ししゅうでも、図柄に依つては、とても

我慢できなくなるものがあります。そんなに皮膚のやまいを嫌っているので、自然と用心深く、いままで、ほとんど吹出物の経験なぞ無かったのです。そうして結婚して、毎日お風呂へ行つて、からだをきゅつきゅつと糠でこすつて、きつと、こすり過ぎたのでございましょう。こんなに、吹出物してしまつて、くやしく、うらめしく思います。私は、いったいどんな悪いことをしたというのでしよう。神さまだつて、あんまりだ。私の一ばん嫌いな、嫌いなものをごとさらにくださつて、ほかに病気が無いわけじやなし、まるで金の小さな的をすぽんと射当てたように、まさしく私の最も恐怖している穴へ落ち込ませて、私は、しみじみ不思議に存じました。

翌る朝、薄明のうちにもう起きて、そつと鏡台に向つて、ああと、うめいてしまいました。私は、お化けでございます。これは、私の姿じやない。からだじゆう、トマトがつぶれたみたいで、頸にも胸にも、おなかにも、ぶつぶつ醜怪を極めて豆粒ほども大きい吹出物が、まるで全身に角が生えたように、きのこが生えたように、すきまなく、一面に噴き出て、ふふふ笑いたくありません。そろそろ、両脚のほうにまで、ひろがっているのだから、ございませぬ。鬼。悪魔。私は、人ではございませぬ。このまま死なせて下さい。泣いては、いけない。こんな醜怪なからだになつて、めそめそ泣きべそ搔いたつて、ちつとも可愛くないばかりか、いよいよ熟柿がぐしやと潰れた<sup>つぶ</sup>みたいに滑稽で、あさましく、手もつけ

られぬ悲惨の光景になつてしまふ。泣いては、いけない。隠してしまおう。あの人は、まだ知らない。見せたくない。もともと醜い私が、こんな腐つた肌になつてしまつて、もうもう私は、取り柄がない。屑だ。<sup>くず</sup>はきだめだ。もう、こうなつては、あの人だつて、私を慰める言葉が無いでしょう。慰められるなんて、いやだ。こんなからだを、まだいたわるならば、私は、あの人を軽蔑<sup>けいべつ</sup>してあげる。いやだ。私は、このままおわかれしたい。いたわっちゃ、いけない。私を、見ちゃいけない。私の傍にいてもいけない。ああ、もつと、もつと広い家が欲しい。一生遠くはなれた部屋で暮りたい。結婚しなければ、よかつた。二十八まで、生きていなければよかつたのだ。十九の冬に、肺炎になつたとき、あるとき、

なおらずに死ねばよかったのだ。あのとき死んでいたら、いまこんな苦しい、みつともない、ぶざまの憂目を見なくてすんだのだ。私は、ぎゅつと堅く眼をつぶったまま、身動きもせず坐って、呼吸だけが荒く、そのうちになんだか心までも鬼になってしまいう心配が感じられて、世界が、シンと静まって、たしかにきのうまでの私で無くなりました。私は、もそもそ、けものみたいに立ち上り着物を着ました。着物は、ありがたいものだと、つくづく思いました。どんなおそろしい胴体でも、こうして、ちゃんと隠してしまえるのですものね。元気を出して、物干場へあがってお日様を険しく見つめ、思わず、深い溜息ためいきをいたしました。ラジオ体操の号令が聞えてまいります。私は、ひとりで侘びしく体操はじ



めて、イツチ、ニツ、と小さい声出して、元気をよそってみましたが、ふっとたまらなく自分がいじらしくなって来て、とてもつづけて体操できず泣き出しそうになって、それに、いま急激にからだを動かしたせいとか、頸と腋わきした下の淋巴腺りんばせんが鈍く痛み出して、そつと触つてみると、いずれも固く腫れていて、それを知ったときには、私、立って居られなく、崩れるようにぺたりと坐つてしまいました。私は醜いから、いままでこんなにつつましく、日陰を選んで、忍んで忍んで生きて来たのに、どうして私をいじめるのです、と誰にともなく焼き焦げるほどの大きい怒りが、むらむら湧わいて、そのとき、うしろで、

「やあ、こんなところにいたのか。しよげちやいけねえ。」とあ

の人の優しくつぶやく声<sup>つぶや</sup>がして、「どうなんだ。少しは、よくなったか？」

よくなったと答えるつもりだったのに、私の肩に軽く載せたあの人の右手を、そつとはずして、立ち上り、

「うちへかえる。」そんな言葉が出てしまつて、自分で自分からなくなつて、もう、何をするか、何を言うか、責任持てず、自分も宇宙も、みんな信じられなくなりました。

「ちよつと見せなよ。」あの人の当惑したみたいなの、こもつた声<sup>こもつた声</sup>が、遠くからのように聞えて、

「いや。」と私は身を引き、「こんなところに、グリグリができてえ。」と腋の下に両手を当てそのまま、私は手放しで、ぐしや

と泣いて、たまらずああんと言が出て、みっともない二十八のおたふくが、甘えて泣いても、なんのいじらしさが在ろう、醜悪の限りとわかつていても、涙がどどん沸いて出て、それによだれも出てしまつて、私はちつともいいところが無い。

「よし。泣くな！ お医者へ連れていつてやる。」あの人の声が、いままで聞いたことのないほど、強くきつぱり響きました。

その日は、あの人もお仕事を休んで、新聞の広告しらべて、私もせんに一、二度、名だけは聞いたことのある有名な皮膚科専門のお医者に見てもらふことにきめて、私は、よそ行きの着物に着換えながら、

「からだを、みんな見せなければいけないかしら」

「そうよ。」あの人は、とても上品に微笑<sup>ほほえ</sup>んで答えました。「お医者者を、男と思っちゃいけないえ。」

私は顔を赤くしました。ほんのりとうれしく思いました。

外へ出ると、陽の光がまぶしく、私は自身を一匹の醜い毛虫のように思いました。この病気のなおるまで世の中を真暗闇の深夜にして置きたく思いました。

「電車は、いや。」私は、結婚してはじめてそんな贅<sup>ぜいたく</sup>沢<sup>たく</sup>なわがまま言いました。もう吹出物が手の甲にまでひろがって来ていて、いつか私は、こんな恐ろしい手をした女のひとを電車の中で見たことがあって、それからは、電車の吊<sup>つり</sup>革<sup>かわ</sup>につかまるのさえ不潔で、うつりはせぬかと気味わるく思っていたのですが、いまは私

が、そのいつかの女のひとの手と同じ工合になってしまつて、「身の不運」という俗な言葉が、このときほど骨身に徹したこと  
はございませぬ。

「わかつてるさ。」あの人は、明るい顔してそう答え、私を、自動車に乗せて下さいました。築地から、日本橋、高島屋裏の病院まで、ほんのちよつとでございましたが、その間、私は葬儀車に乗っている気持でございました。眼だけが、まだ生きていて、巷ちまたの初夏のよそおいを、ぼんやり眺めて、路行く女のひと、男のひと、誰も私のように吹出物していないのが不思議でなりませんでした。

病院に着いて、あの人と一緒に待合室へはいつてみたら、ここ

はまた世の中と、まるつきりちがった風景で、ずっとまえ築地の小劇場で見た「どん底」という芝居の舞台面を、ふいと思い出しました。外は深緑で、あんなに、まばゆいほど明るかったのに、ここは、どうしたのか、陽の光が在っても薄暗く、ひやと冷い湿気があつて、酸<sup>す</sup>いにおいが、ぷんと鼻について、盲人どもが、うなだれて、うようよいる。盲人ではないけれども、どこか、片輪の感じで、老爺老婆の多いのには驚きました。私は、入口にちかい、ベンチの端に腰をおろして、死んだように、うなだれ、眼をつぶりました。ふと、この大勢の患者の中で、私が一ばん重い皮膚病なのかも知れない、ということに気がつき、びっくりして眼をひらき、顔をあげて、患者ひとりひとりを盗み見いたしました

が、やはり、私ほど、あらわに吹出物している人は、ひとりもございませんでした。皮膚科と、もうひとつ、とても平気で言えなような、いやな名前の病氣と、そのふたつの専門医だったことを、私は病院の玄関の看板で、はじめて知ったのですが、それは、あそこに腰かけている若い綺麗な映画俳優みたいな男のひとつ、どこにも吹出物など無い様子だし、皮膚科ではなく、そのもうひとつのほうの病氣なのかも知れない、と思えば、もう皆、この待合室に、うなだれて腰かけている亡者たち皆、そのほうの病氣のような気がして来て、

「あなた、少し散歩していらっしやい。ここは、うつとうしい。」  
「まだ、なかなからしいな。」あの人は、手持ぶさたげに、私の

傍に立ちつくしていたのでした。

「ええ。私の番になるのは、おひるごろらしいわ。ここは、きたない。あなたが、いらつしやつちや、いけない。」自分でも、おや、と思ったほど、いかめしい声が出て、あの人も、それを素直に受け取ってくれた様子で、ゆつくりと首肯うなずき、

「おめえも、一緒に出ないか？」

「いいえ。あたしは、いいの。」私は、微笑んで、「あたしは、ここにるのが、一ばん楽なの。」

そうしてあの人を待合室から押し出して、私は、少し落ちつき、またベンチに腰をおろし酸っぱいように眼をつぶりました。はたから見ると、私は、きつとキザに気取って、おろかしい瞑めい想そうに



ふけっているばあちゃん女史に見えるでしょうが、でも、私、こうしているのが一ばん、らくなんですもの。死んだふり。そんな言葉、思い出して、可笑おかしゆうございました。けれども、だんだん私は、心配になってまいりました。誰にも、秘密が在る。そんな、いやな言葉を耳元みみもとに囁ささやかれたような気がして、わくわくしてまいりました。ひよつとしたら、この吹出物も——と考え、一時に総毛立つ思いで、あの人の優しさ、自信の無さも、そんなところから起つて来ているのではないのかしら、まさか。私は、そのときはじめて、可笑しなことでございますが、そのときはじめて、あの人にとっては、私が最初で無かったのだ、ということに実感を以て思い当り、いても立っても居られなくなりました。だまさ

れた！　結婚詐欺。唐突にそんなひどい言葉も思い出され、あの人を追いかけて行って、ぶってやりたく思いました。ばかですね。はじめから、それが承知であの人のところへまいりましたのに、いま急に、あの人を、最初でないこと、たまらぬ程にくやく、うらめしく、とりかえしつかない感じで、あの人を、まえの女のひとのことも、急に色濃く、胸にせまって来て、ほんとうに始めて、私はその女のひとを恐ろしく、憎く思い、これまで一度だつて、そのひとのこと思ってもみたことない私の呑気さのんき加減が、涙の沸いて出た程に残念でございました。くるしく、これが、あの嫉妬しつとというものなのでしょうか。もし、そうだとしたならば、嫉妬というものは、なんと救いのない狂乱、それも肉体だけ

の狂乱。一点美しいところもない醜怪きわめたものか。世の中には、まだまだ私の知らない、いやな地獄があったのですね。私は、生きてゆくのが、いやになりました。自分が、あさましく、あわてて膝の上の風呂敷包をほどき、小説本を取り出し、でたらめにペエジをひらき、かまわずそこから読みはじめました。ボヴァリイ夫人。エンマの苦しい生涯が、いつも私をなぐさめて下さいます。エンマの、こうして落ちて行く路が、私には一ばん女らしく自然のもののように思われてなりません。水が低きについて流れるように、からだのだるくなるような素直さを感じます。女って、こんなものです。言えない秘密を持って居ります。だって、それは女の「生れつき」ですもの。泥沼を、きつと一つずつ持って居

ります。それは、はつきり言えるのです。だって、女には、一日が全部ですもの。男とちがう。死後も考えない。思索も、無い。一刻一刻の、美しさの完成だけを願って居ります。生活を、生活の感触を、できあい溺愛いたします。女が、お茶碗や、きれいな柄の着物を愛するのは、それだけが、ほんとうの生き甲斐だからでございませう。刻々の動きが、それがそのまま生きていること目的なのです。他に、何が要りませう。高いリアリズムが、女のこの不埒ふらちと浮遊を、しっかり抑えて、かしくなくあばいて呉くれたなら、私たち自身も、からだがきまつて、どのくらい楽か知れないとも思われるのですが、女のこの底知れぬ「悪魔」には、誰も触らず、見ないふりをして、それだから、いろんな悲劇が起る

のです。高い、深いリズムだけが、私たちをほんとうに救ってくれるのかも知れませぬ。女の心は、いつわらずに言えば、結婚の翌日だって、他の男のひとのことを平気で考えることができるのでございますもの。人の心は、決して油断がなりませぬ。男女七歳にして、という古い教えが、突然おそろしい現実感として、私の胸について、はっと思いました。日本の倫理というものは、ほとんど腕力的に写実なのだ、目まいのするほど驚きました。なんでもみんな知られているのだ。むかしから、ちゃんと泥沼が、明確にえぐられて在るのだと、そう思ったら、かえって心が少しがすがしく、爽さわやかに安心して、こんな醜みにくい吹出物だらけのからだになっても、やっぱり何かと色気が多いおばあちゃん、と余

裕を持って自身を憫びんしょう笑しょうしたい気持も起り、再び本を読みつつ  
けました。いま、ロドルフが、更にそつとエンマに身をすり寄せ、  
甘い言葉を口早に囁ささいているところなのですが、私は、読みなが  
ら、全然別な奇妙なことを考えて、思わずにやりと笑ってしま  
いました。エンマが、このとき吹出物していたら、どうだったろう、  
とへんな空想が湧わいて出て、いや、これは重大なイデエだぞ、と  
私は真面目になりました。エンマは、きつとロドルフの誘惑を拒  
絶したにちがいない。そうして、エンマの生涯は、まるつきり違  
ったものになってしまった。それにちがいない。あくまでも、拒  
絶したにちがいない。だって、そうするより他に、仕様ないんだ  
もの。こんなからだでは。そうして、これは喜劇ではなく、女の

生涯は、そのときの髪のかたち、着物の柄、眠むたさ、または些さ細さいのからだの調子などで、どしどし決定されてしまうので、あんまり眠むたいばかりに、背中のうるさい子供をひねり殺した子守女さえ在ったし、ことに、こんな吹出物は、どんなに女の運命を逆転させ、ロマンスを歪わい曲きょくさせるか判りませぬ。いよいよ結婚式というその前夜、こんな吹出物が、思いがけなく、ぷつんと出て、おやおやと思うまもなく胸に四肢に、ひろがってしまったら、どうでしょう。私は、有りそうなことだと思えます。吹出物だけは、ほんとうに、ふだんの用心で防ぐことができない、何かしら天意に依るもののように思われます。天の悪意を感じます。五年ぶりに帰朝する御主人をお迎えにいそいそ横浜の埠頭ふしとう、胸お

どらせて待っているうちにみるみる顔のだいじなところに紫色の腫物はれものがあらわれ、いじくつているうちに、もはや、そのよるこびの若夫人も、ふためと見られぬお岩さま。そのような悲劇もあり得る。男は、吹出物など平気らしゅうございますが、女は、肌だけで生きて居るのでございますもの。否定する女のひとは、嘘つきだ。フロベエルなど、私はよく存じませぬが、なかなか細密の写実家の様子で、シャルルがエンマの肩にキスしようとする、（よして！ 着物に皺が、——）と言って拒否するところがございますが、あんな細かく行きとどいた眼を持ちながら、なぜ、女の肌の病気のくるしみに就いては、書いて下さらなかつたのでしょうか。男の人にはとてもわからぬ苦しみなのでしょうか。それと



も、フロベエルほどのお人なら、ちゃんと見抜いて、けれどもそれは汚ならしく、とてもロマンスにならぬ故、知らぬふりして敬遠しているのをごさいますようか。でも、敬遠なんて、ずるい、ずるい。結婚のまえの夜、または、なつかしくてならぬ人と五年ぶりに逢う直前などに、思わぬ醜怪の吹出物に見舞われたら、私ならば死ぬる。家出して、墮落してやる。自殺する。女は、一瞬間一瞬間の、せめて美しさのよろこびだけで生きているのだもの。明日は、どうなつても、——そつとドアが開いて、あの人<sup>りす</sup>が栗鼠に似た小さい顔を出して、まだか？ と眼でたずねたので、私は、蓮っ葉にちよつちよつと手招きして、

「あのね、」下品に調子づいた甲高い声だったので私は肩をすく

め、こんどは出来るだけ声を低くして、「あのね、明日は、どうなつたつていい、と思ひ込んだとき女の、一ばん女らしさが出ていると、そう思わない？」

「なんだつて？」あの人、まごついているので私は笑いました。「言いかたが下手なの、わからないわね。もういいの。あたし、こんなところに、しばらく坐っているうちに、なんだか、また、人が変つちやつたらしいの。こんな、どん底にいます、いけないらしいの。あたし、弱いから、周囲の空気に、すぐ影響されて、馴れてしまうのね。あたし、下品になつちやつたわ。ぐんぐん心が、くだらなく、墮落して、まるで、もう」と言いかけて、ぎゅつと口を噤つぶんでしまいました。プロステチウト、そう言おうと思

つていたのでございます。女が永遠に口に出して言っではいけない言葉。そうして一度は、必ず、その思いに悩まされる言葉。まるつきり誇を失ったとき、女は、必ずそれを思う。私は、こんな吹出物して、心まで鬼になってしまっているのだな、と実状が薄ぼんやり判つて来て、私が今まで、おたふく、おたふくと言つて、すべてに自信が無い態ていを装つていたが、けれども、やはり自分の皮膚だけを、それだけは、こつそり、いとおしみ、それが唯一のプライドだったのだということを、いま知らされ、私の自負していた謙讓にせものだの、つつましさだの、忍従だのも、案外あてにならない。贖物にせもので、内実は私も知覚、感觸の一喜一憂だけで、めくらのように生きていたあわれな女だったのだと氣附いて、知覚、



ぜ。」

看護婦に招かれて、診察室へはいり、帯をほどいてひと思いに肌ぬぎになり、ちらと自分の乳房を見て、私は、石榴ざくろを見ちやつた。眼のまえに坐っているお医者よりも、うしろに立っている看護婦さんに見られるのが、幾そう倍も辛うございました。お医者には、やっぱり人の感じがしないものだと思います。顔の印象さえ、私には、はつきりいたしませぬ。お医者の方でも、私を人の扱いせず、あちこちひねくって、

「中毒ですよ。何か、わるいものを食べたのでしょうか。」平気な声で、そう言いました。

「なおりましようか。」

あの人、たずねて呉れて、

「なおります。」

私は、ぼんやり、ちがう部屋にいるような気持で、聞いていたのでございます。

「ひとり、めそめそ泣いていやがるので、見ちゃ居れねえのです。」

「すぐ、なおりますよ。注射しましょう。」

お医者、立ち上りました。

「単純な、ものなのですか？」とあの人。

「そうですとも。」

注射してもらって、私たちは病院を出ました。

「もう手のほうは、なおっちやった。」

私は、なんども陽の光に両手をかざして、眺めました。

「うれしいか？」

そう言われて私は、恥ずかしく思いました。





# 青空文庫情報

底本：「きりぎりす」新潮文庫、新潮社

1974（昭和49）年9月30日初版発行

初出：「文学界」

1939（昭和14）年11月

入力：深山香里

校正：佐々木春夫

1999年2月4日公開

2009年3月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 皮膚と心

太宰治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>